

## 朝鮮，靜觀一禪の淨土觀について

韓 普 光 (泰 植)

### 1. 靜觀一禪の生涯

朝鮮中期の靜觀堂である一禪禪師（1533-1608）は西山休靜の上足弟子として豊臣秀吉の朝鮮侵略である壬辰倭亂を経験した。その時、彼は 60 歳であったので戦争に直接参加せず、山中で修行に専力していた。彼の生涯と行狀に関する資料はあまり残されておらず、ただ、弟子である普天によって刊行された『靜觀集』に載せられている石濼道人と僧叟の序文が現存するのみである。『靜觀集』には 64 篇の詩と 13 篇の文が収録されている。

その序文を綜合すれば、彼は湖南の連山に出生し、俗姓は郭氏、母は李氏であった。1533 年に誕生し、15 歳で出家して白霞禪雲の門下に『法華經』を學んだ。法名は一禪であり、自號は靜觀である。

彼は禪科に登科したのみならず、教學にも能通し、西山休靜に入室して參禪修行して修禪すると、西山よって禪旨を認められた。彼はまた、外典に博學多識し、詩文にも能通した大文章家であり、その門下生は數百を數えた。

70 歳のときに俗離山の法住寺で僧侶 200 餘名を集めて『法華經』を講義した。彼については、1620 年に『靜觀集』の序文を作った石濼道人による人物評がある。1603 年、石濼道人は靜觀が住席していた法住寺の福泉庵で彼と一泊したのだが、その際に靜觀の人柄について受けた印象を次のように述べている。

往在癸卯春 尋山到俗離 聞禪公率弟子二百餘人 方在大庵寺 講法華經 以書招至福泉 留與同宿 見其容 寂如睡鶴 觀其氣 恬如古井 與之語而扣 其中所有 則於其書 無所不通 而無一點矜高自喜之色 真空門之老宿也（韓佛全 8. 24. b）

ここに我々は、彼の高邁な人柄を見ることができる。彼は常に靜かであり、安らかであり、博學多識でありながら、驕慢でなく、謙虚な善知識であったと思われる。彼はその後、徳裕山の白蓮社に離席してそこで入寂した。彼は戊申（1608）年秋のある日病氣になり、門徒を集めた後に入寂を豫告すると、お茶を飲み、沐

浴齋戒したあと、二篇の臨終偈を詠って、明くる日に坐脱入亡したという。世臘は76歳であり、法臘は61歳であった。茶毘のあと靈骨を收拾して徳裕山の白蓮社と俗離山の法住寺に奉安した。

西山休靜の上足弟子であった彼の門下には任性忠彦、浩然太浩、無染戒訓、雲谷、冲翠、盖實普天など多数の弟子があり、いわゆる靜觀門派を形成した。特に、俗家の甥であり、佛家では弟子であった盖實普天は靜觀に一生を侍奉し、入寂あとは『靜觀集』を編纂した（韓佛全8.29.b）。

靜觀が60歳の年、すなわち朝鮮王宣祖25年（1592）の4月に豊臣秀吉の朝鮮侵略である壬辰倭亂が勃發した。宣祖王は彼の師僧である西山大師に倭敵の撃退するために八道十六宗都摠攝に任命した。その時、西山休靜は73歳であった。西山は順安の法興寺を本據地として1,500人の義僧軍を集め、四溟惟政が1,000人を集めると總勢2,500人の義僧兵ができた。その際四溟は義僧都大將となると平壤城を奪還した（『清虛集』（韓佛全7.735.b））。

西山は全國の寺刹に手紙を送って青年僧侶達に僧軍へ参加することを督勵する一方、老齡の僧と病氣の僧に山寺で國家の戰勝のために祈禱することを當付した。靜觀一禪はこの時老齡として僧軍に従軍せず、山中修行と祈禱に専念した。彼はまた戰爭の一線に參與した僧侶達にも早く山寺にもどることを促求している。僧侶の身分として戰爭に直接參與することより修道と祈禱による救國の道を選んだのである。

## 2. 淨土觀

靜觀はまた、山中での參禪修行のみならず、國家のための祈禱と佛事にも獻身した。戰爭には參與しなかったものの、彼が參與した戰歿者の追善供養およびおの佛事の疏には彼の淨土觀が現われている。彼の淨土に関する資料は三つに區分することができる。一つ目は他力的な淨土信仰と念佛修行である。二つ目は戰勝のための護國祈願文である。三つ目は戰爭で死亡した犠牲者のために行った薦魂齋と水陸齋などに見られる薦魂文である。このような資料を分析すれば、靜觀の他力信仰的な淨土觀が見出される。

第一の靜觀の淨土についての文章は斷片的ではあるものの、間接的な表現を用いた祈願的、他力的なものであると推察しうる。「勸詞」は次のようにある。

億萬同叅非小事 無爲眞境種因緣 三錢布施榮千劫 一器飯僧登九蓮  
墜露添流言可采 纖塵足岳語堪傳 人家積善有餘慶 後得菩提豈偶然（韓佛全8.28.c）

(28)

朝鮮，靜觀一禪の淨土觀について（韓）

という。ここでは一般的な布施の功德について述べられているが、特に注目に値するものは“僧侶に一鉢の供養をする功德によって極樂世界の九品蓮臺に往生することができる”，“布施の功德によって來生に大覺を成就することができる”といった文章である。靜觀はここで、布施の功德によって極樂往生が可能であり、さらに成佛までも成就することができるかと述べている。ここには彼の布施功德の勸善と聯關する淨土觀をかいま見ることができる。

淨土信仰を積極的に勸誘する文章もある。次は彼が在家佛子である居士に法名を與える時に書いた「朴居士須道號以仁智書贈」という題號文である。

年將四十 頓覺無常 不顧家業 唯以淨土爲念 遙想樂邦 孜孜日新 其功亦 不幾於智乎 由是觀之 居士之所行盡其忠孝之義 而有保身之良策也……願居士因名得道 超出向上一路 直入維摩丈室 與淨名居士 共坐解脫之床 則此仁智之名 固非虛說 更須勤脩淨上之業 永棄塵勞之因 則安樂國九蓮臺 決支往生 幸望毋忽（韓佛全 8. 29. c）

朴居士は信心が深く、人格の立派な40代の在家信者であった。靜觀の人物評によれば、朴居士は在俗人でありながら、俗世であまり見られない脱俗の人柄であった。彼は40代になって人生の無常を自覺して、家業を離れて淨土念佛に専念したようである。出世間的な淨土業を修行する人として彼の法名は仁智居士とされた。ここでは最上修行である淨土業を懸命に修することが勧められ、また、念佛して輪廻を解脫して九品蓮臺に往生することが願われている。この題號文によれば、靜觀自分も淨土業を修行したと思われる。

第二には、二つ目の護國祈禱文は、懇切な祈願の内容がある。これは佛の加被力を信じる淨土門の他力信仰に当たる。「觀音祈禱文」は次のような文章である。

現無邊身 普應於微塵刹土 施無畏力 能拔其苦難衆生 苟切歸依 必蒙聖佑 由是清淨道場而結界 精脩淨饌而開壇 瀝一心而精勤 歸三業而禮請 伏願他心道眼 無碍見聞 動大哀憐 宜薰加被 俯使松雲 仰賴不思之力 即悅賊巢 密憑無畏之威 早離夷域 快乘迅航 帶順風而截鯨波 疾揮輕橈 經瞬息而到此岸 恭聞聞聲救苦 如響應聲 人苟有誠 聖言不無 仰希菱鑑 俯察霞誠 敬對聖容 表宣謹疏（韓佛全 8. 31. c）

この觀音祈禱文は壬辰倭亂の戦争の後に戦後の問題を解決するために日本に向かう当時の四溟惟政、松雲大師の無事な歸國を願う祈禱文である。

觀世音菩薩の威神力と功德力を確信して祈禱壇を設置し、結界を作って觀音祈禱を行じた。彼は自力的な修行を主唱する禪師でありながら、他力的な祈禱も重要視している。

他に、阿彌陀佛三尊像を造成して點眼する際に發願する「彌陀觀音勢至點眼文」

という祈禱文がある。

伏念弟子 禪林病葉 釋苑枯根……盍遂三聖之像 廣募同志 購求名工 一彌陀中央而拱毫五峯眼 四海炯煌於斯 二菩薩左右而隨眉初月髻 千花宛轉於彼 罄倒一心之誠懇 點開五根之光明 紫金輝百億刹中 有緣皆度 甘露灑三千界外 無物不滋 應既如斯 願何不遂……次願先王先后云云 霑斯慧澤 滋其洪波 青蓮臺上 明性相之如如 白毫光中 悟眞常之了了 然後願與共緣檀那之輩 及異生輪轉之流 壞諸趣因 永舍泥沙之苦域 成自心果 共生金寶之樂邦 餘波一涓 普潤衆苦 仰對大覺 表宣謹疏（韓佛全 8. 32. a）

禪師である靜觀が阿彌陀佛の三尊像を造成して點眼文を作ったという事実に淨土信仰との聯關を見出すことができる。當時は戦争によって全國土が荒敗し、寺刹は破壊され、祠堂に祖上のための祭祀を奉ることもできなかつた。このような國難を克復するために阿彌陀佛三尊像を造成したのである。彼は阿彌陀佛と觀音菩薩及び大勢至菩薩像を造成し、點眼しながら、阿彌陀如來の威神力によってこの世の中に光明を放たれ、衆生が濟度され、甘露の法雨が降ることを祈った。彼はまた、主上殿下の萬壽無疆、先王と先后の往生極樂を發願している。

特に先王と先后の往生發願では淨土の願力に關する内容が見出される。青蓮臺に往生し、自性が清淨になり白毫光明によって大覺を成就する。その後、再び娑婆世界に還生して衆生救濟の願力菩薩として還生することが願われている。このような點眼文によれば、彼は淨土三部經の教えに充實に隨う念佛修行者であったと判断することができるだろう。

先述のように彼は戦争に直接參與はしなかつたものの、國家のために祈禱と戦歿犠牲者の追善儀式を行ったが、その中の一つが水陸齋である。「水陸疏」には次のようにある。

……若非三寶慈悲之力 難得孤魂度脫之期 由是各捨有限之珍財 共脩無遮之勝會 敷宣喻伽之大教 恭陳香積之珍羞 以世諦莊嚴 成眞法供養 虔誠所格 聖應必通 伏願主上云云 后殿受無窮之快樂 東宮享不老之春秋 次願先王先后 當生淨刹 先亡父母 直往樂邦 兼及法界 具識含靈 客死他鄉 橫夭冤魂咸 脫苦輪俱登覺岸 次願各各與緣化比丘等 現增福壽 殄滅灾殃 當證菩提 化度衆生 無邊法界含靈 盡獲金剛種智 仰對金容 表宣謹疏（韓佛全 8. 33. b）

前半部では當時の社會相が表現されている。戦争の慘狀と民心の離反によって國內政勢が非常に不安であった。このような状況の中で傳染病まで猖獗し多數の國民が死亡していた。

中半部は水陸齋壇の模様と薦魂方法について述べている。戦争によって非命横死した戦歿者らの靈魂を慰勞し、阿彌陀如來の威神力によって孤魂を遷度するために水陸齋を行じると述べられている。數多の人が財物を布施して壇を設置し、

## (30) 朝鮮，靜觀一禪の淨土觀について（韓）

無遮大法會を開き、瑜伽の秘密法として齋壇を莊嚴したと記されている。

後半部では主上と王妃など王室の安寧と萬壽無疆が祈願され、すでに死亡した先王と先祖及び戦死者などの往生極樂の發願が行われる。淨土往生の祈願を分明に表現している。彼は阿彌陀如來の加被力による靈駕の往生極樂と輪廻からの解脱を發願している。なお、水陸齋のために布施した比丘など同參者のための現世の安樂、死後の往生極樂の發願も行われている。靜觀が主觀した水陸大齋は簡単な靈駕遷度の儀式ではなく國家的に行なわれた國行水陸齋であった。

第三に、靈駕薦魂文に見られる往生祈願の薦魂疏がある。彼には亡父疏と亡母疏及び亡師疏など數篇の薦魂疏があるが、これらを分析すれば、彼の淨土觀を考察することができる。次は「亡父疏」（韓佛全 8.32.b）の文章である。

……惟薦拔之 是宜肆以齋 當練服之辰 序屬玄冬之節 恭趨精舍 開水陸之勝筵 邀命緇流 演靈山之妙典 爐焚牛首樂震魚音 獻趙州茶 陳香積飯 營締雖少 感應必周 伏願某靈駕 蒙茲薦拔 永脫苦淪 上生兜率 天內宮院 親聞慈氏之圓音 直往極樂國上蓮臺 獲蒙彌陀之授記 次願其人等 現增福壽而離災害 當生淨刹而證菩提 法雨所流 含靈共沐 仰對毫相 被讀薦疏

靜觀は父母への孝心にも至極したと考えられる。彼はまた、父親と母親及び長兄のために寒食節での薦魂疏も奉行した。彼は父親のために水陸齋を奉行する際に僧侶を招請して魚山で念佛し、靈山の妙典を演じたという。ここでいう靈山の妙典とは『妙法蓮華經』であろう。彼は『法華經』と縁が深い。したがって、彼の教學的な背景は『法華經』による法華思想が根幹を成している。

ところで彼は、先親が念佛薦魂功德によって兜率天の内院宮に上生することを願っている。その後往生極樂することを發願している。したがって、凡夫衆生は直接に極樂に往生するのは無理があるので先に兜率天に上生した後に極樂往生を發願しているのであろう。

そして、遷度齋の同參者に対してもこのような功德によって現世の萬壽無疆と福德と智慧増長を發願している。また、來世には極樂淨土に往生して菩提道を悟り、皆が甘露法雨に沐浴することを發願している。また、母親のために行じた薦度齋もある。「亡母疏」（韓佛全 8.32.c）には次のようにある。

……肆當五七之齋夕 恭陳水陸之勝筵 邀命禪流 演說妙法 香焚牛首 樂震魚音 燈燭交羅 露赤心之片片 幡花鬪綵 呈懇意之綿綿 獻趙州茶 陳香積飯 舞迦葉之舞 歌緊那之歌 芥緣雖五嶽之一塵 菱鑑若干江之孤月 伏願亡母云云 先亡祖考 咸脫苦海 超生樂邦 身登九品之蓮臺 耳聞一乘之妙法 親蒙佛記 速證菩提 次願辦會齋者等 承此良緣 莊嚴萬德 福基永固 壽量無窮 然後願無邊法界含靈 盡獲金剛種智 餘波所泊 苦類咸蘇 仰對金容 披讀謹疏

靜觀は亡母の49齋のうちの5齋のとき水陸齋を行じた。前半部では母親の徳行と品性について説かれている。

次に水陸齋の試演の様子が詳しく記録されている。禪師達を招請して法門を説き、『妙法蓮華經』の説法會を開設した。そして、魚山を演奏し、法螺を吹き、緋緞に幡と花で刺繍して莊嚴し、趙州の茶を奉まつり、財物としてご飯と果物などで莊嚴し、婆囉舞を踊っている。このような水陸齋の示演についての詳しい記録は他ではあまり見られない。したがって、この「亡母疏」は水陸齋の研究における貴重な資料になる。

また、ここでは亡母と先亡祖考祖上が極樂世界に往生し阿彌陀佛の説法を聞き、そのあと受記を受けて菩提道を成就するように發願している。さらには、同參者などの萬壽無疆と多福を祈り、孤魂達の金剛智の成就と極樂往生を願っている。

終りには師僧のための薦魂疏がある。これはおそらく清虛休靜の入寂の時に作られたものであろう。彼の師僧は80餘歳に入寂し、曹溪法脈を傳燈したものと記録されている。ここでは直接的に往生極樂という表現をしていない。「亡師疏」(韓佛全8.33.a)には次のようにある。

伏願仙靈 更傳祖燈之靈焰 長作禪源之正派 常爲覺皇之法臣 重紹佛日之勝輝 餘波所泊 等沐群萌 仰對金容 表宣謹疏

ここでは極樂往生の發願より禪脈を繼承して正法眼藏を伝えることを祈願している。

したがって彼は禪師でありながら、大文章家であり、また淨土信仰を勧められた淨土家であろう。

彼は自性彌陀・唯心淨土より指方立相的な西方淨土と稱名念佛を重要視した。彼は朴居士の題號文に西方淨土・往生極樂を發願するように勧めている。なお、亡父母と亡師僧のために薦度齋を奉じながら、靈駕の往生極樂を祈っている。即ち、靜觀一禪は自力的な禪修行と他力信仰である淨土信仰を兼修しながら、佛教教團と傳統的な修行を傳承した善知識である。

---

〈參考資料〉

休靜『清虛集』(補遺)「清虛堂行狀」(韓佛全7)

一禪著『靜觀集』(韓佛全8)

林薰『葛川集』「徳裕山香積峰記」

〈キーワード〉 靜觀一禪、『靜觀集』、水陸疏、壬辰倭亂、朝鮮、淨土觀

(東國大學校教授、文博)